

家族理論と家政学

福田 はぎの*

はじめに

家族にかかわる様々な論議のうちに、家族それ自体の理論を解明する家族理論という研究領域を設定することができる。現今、往々に論ぜられる家族問題（夫婦間や親子間などに生じている問題）あるいはより一般的に家族に言及した論議・著作等は、総じて家族の諸現象を扱っている。しかし一様に家族を問題にしている（とくに現象のレベルで）ことと、それらのうちのどの程度が、いかに特定の家族理論を準備しているか、ということとは区別する必要がある。家族にかかわる問題の科学的解明に際して、必ず必要とされるのは何をもって家族と規定するかという概念的準備である。またこの準備自体が一定の科学的手続きを経て整備・獲得されるものであり、この過程こそ家族理論の領域の主要課題と考えられる。

家族理論の必要性は客観的には、これを前面に打ち出すと打ち出さないとにかかわらず、研究者が家族という課題にかかわる限りにおいて発生しているといえる。またその内容は、論者の学問的立場の独自性とも直接的にかかわってくると考えられる。状況は家政学についても同様であろう。しかし従来、家政学はこの課題にどの程度対応してきたであろうか。この点には、一定の疑問が生じないでもない。同時に、この問題にかんする家政学のこれまでの実状を省みる必要性を感じる。そこで以下では、ごく限られた視点からではあるが、この必要性に応え、過去を振り返ってみることにしたい。そこにどのような家政学の主観的状況があったのかも検討してみたい。家政学が家族を問題とする機会がますます増加しつつある現在、こうした作業がさまざまな視角から繰り返し試み

られることが、家族理論ひいては家政学的立場を鮮明にしていく有効な方途だと思われる¹⁾。

1. 家族理論の専門化

はじめに、20世紀に入ったアメリカを舞台に家族研究の専門家たちが出現したことに関し、若干の考察を行いたい。視点は、現代からみて家政学が家族理論に対しどのような社会的位置関係にあったのか、ということにある。

アメリカ家政学会の発足は1909年のことであるが、一方「家族社会学が社会学の分岐として誕生した年は、1924年頃²⁾とされる。19世紀末に至る、家族への関心が「道徳的関心の対象」から「産業化と都市化の犠牲」ないし「社会秩序全体の主要なひずみを構成するもの」等の“社会的関心の対象”へと変遷したことは多く指摘されている³⁾が、この過程に深くかかわった人々のある部分が、初期家族社会学の軌跡を形づくっていく。「1890年には、社会学は曖昧な定義しかもたず、アメリカではごくわずかの大学でせいぜい一講座が設けられていたにすぎなかったのが、1920年には、国内のほとんどの大学で一教科として確立された⁴⁾。なかでも「社会分析の単位として、世帯もしくは家族を扱っていた社会学者は、まもなく彼らの問題領域が特殊な概念や方法を要請される領域であることに気づいた。…家族社会学者は社会学者という研究専門職の出現により、早い時期に分離独立した」のである⁵⁾。

家政学の成立と、このような家族社会学の自立は、時代（20世紀はじめの四半世紀）とその独自の課題（家族にかんする何らかの問題解決）を共有していた。その接点の所在を示唆するのは、レイクプラシッド会議のつぎのような発言である。すなわち“…home economics is coming to the front as a part of sociology” (Mr Melvil

* 文教大学

Dewey, 1900)⁶⁾。もっとも接点というよりは、現代とはまた別の意味で、既成諸科学の境界領域で新しい専門家集団が出現した時代であり⁷⁾、家族社会学もまた家政学もこうした時代の所産であったとみるべきであろうか。しかし、いま、改めてこのように指摘すること自体、新奇という面がないだろうか。つまり、それほど家政学と家族社会学は、少なくとも日本では相互に異なる学問領域として展開してきたようである。しかし事は、日本だけの現象とはいいい得ない。この点について、戦後を含めて日本の家政学のあり方を考えるうえで参考になるのは、当時のアメリカにおける家政学と家族社会学の対照性である。

まず家族社会学においては、20世紀初頭以来、「西欧社会に広汎な変化をもたらした重要な単位」→「社会の変化に対応していくもの」→「(社会化の担い手として)ユニークかつ戦略的な社会制度」→「強靱かつ柔軟な集団」という家族概念の一連の展開があったとされる⁸⁾。そして家族が「強靱かつ柔軟」なのは「(こうした家族の性格が)家族と社会との対外的関係よりも、むしろ家族成員間の相互作用のなかに存するから」だとするバージェス(シカゴ大学)の見解に至る。バージェスは1920年から40年までの家族社会学で最も影響力をもった人物であり、その後少なくとも1955年までの家族研究の主流となる。ところで「家族とは相互作用するパーソナリティの統一体である」という概念設定の方法は、つづいてみる家政学のあり方と比べ、とくに家族理論に対する“ヒト”に即したアプローチであったと相対化できる。言い替えるなら、この家族社会学の展開コースは、家族という集団自体の内的論理(相互作用論)へと収れんされる方向で進んでいったとみることができる。

一方、家政学は、家族の集団的特質はむしろ所与とし、そのシェルター内部で展開される The digestive process, Clothing, The dwelling など「家政」の教育的・科学的研究を展開する方向で進んでいった⁹⁾。家族(ヒト)は、それ自体が科学の対象とされたというより、人間が生きる環境・条件として価値拠点に祭り上げられたか、あるいは衣、食、住などの専門化の波間に隠れがちという傾向が否めない。さらに“The family

is the miniature world and its problems are the same that must be solved in the great world”(Miss Isabel F. Hyams, 1900)¹⁰⁾ということは、家族が社会改良の要因(個人にとってばかりではなく社会にとっての所与の環境・条件)に位置づけられるゆえんともなる。いずれにせよ家族理論の展開という観点に立った場合、家族概念の科学的開拓を放置したまま(ここには既成の家族観を擁護したいという願望・主義が介在していたかもしれない)、しかし家族生活改善の科学は推進するという、一種半科学的な家政学のあり方がみえてくる。

その際「家庭」こそ、こうした家政学の状況にむしろ好都合な用語として高い位座を占めえた、という一定の客観的因果関係を無視することはできない。「家族」に似て非なる「家庭」は、これを人と物の側面に区分することが可能であり、また家政学という科学の専門化は結果的にみて、物に限定してこそより純粋に発展しえた。人の側面は、家族社会学に席を譲ったといい得る余地が大きい。そうであればこそ、「家庭は小さな天国」という抜き難い家政学的主観に対して、バイブルに科学(計量スプーン、科学的調理法やエコノミーな材料選択力ほか)が代替されただけ、という批判¹¹⁾が出現する根拠もあながち否定できない。

このようにみると改めて、家政学と家族社会学の同時代性と、同時に専門的領域の発達における相互の異質性が看取できる。学問分業論の見地から、それはやむを得なかったともいえよう。しかし家族に実態上あるいは姿勢において、ぎりぎりのところまで接近しながら、学問的には放置したとすれば、いったい家政学は「家族」のためのいかなる科学になるのであろうか。こうした疑問が出て来るなか、つづいて日本の場合についても若干の検討を加えてみたい。

2. 常見『原論』と「家族」

日本の家政学が家族理論にかかわったおそらく最初の注目すべき事例は、常見育男(敬称略)の『最新家事教育原論』(1937年、『原論』と略す)であろう。時期的にアメリカの初期家政学および

初期家族社会学の時代とそれほど隔たっていないことにも興味がわくが、それ以上に、日本の家族社会学に関しても、ちょうどこの『原論』と同年に出版された戸田貞三『家族構成』に注目できる。しかも両者の接点を、常見が戸田家族論（それ以前に『社会学』誌上で発表されていたもの）を『原論』に取り入れている点にみることができる。両者を比較対照することにはいろいろ問題もあるが¹²⁾、本稿の関心から貴重な考察対象として是非一度はふれざるをえないと考えられる。

ところで『原論』の「自序」にはつぎのようにある。すなわち「家事教育界及び家事研究界には実用主義的な短見者流が極めて多く」、「家庭自身の経済的・法律的・倫理的・社会的理解については何等の努力をも致さず」という当時の状況のなかで、「最も緊要なる事柄は、家事教育及び家事研究に対する思想的理解であり、これが理論的基礎付けである筈である」と。そして「家庭生活の基本的意義」の考察にあてられた第一章が、とくに「家庭生活」に関して、自ら「緊要なる事柄」に応えたものとみることができる。当時の家政学界におけるこうした氏の学問姿勢の画期性はいうまでもないが¹³⁾、ここでは別の観点から、第二節「家庭生活の道徳的考察」で主要論題として登場する「家族」の扱い方に注目したい。

第二節はさらに4つの項（「家庭生活の現状」、「家庭生活の職能に関する諸説」、「家庭生活の職能解説」、「家族生活と家事教授」）に分かれているが、初めの3つの項で、多く「家族」を論じている（最後の項に「家族」の語は極めて乏しく、「家庭生活と家事教授」と題するほうが適当であったと思われる）。このうち明示的に戸田をあげているのは「家庭生活の職能に関する諸説」で、その家族概念の要約が倫理学者タフツと社会学者のフェアバンクスとならんで紹介されている。もっとも家族論の吟味が意識的に構想されていたとは思われない。同じ箇所でも倫理学者深作安文の説については「家」（場所的意味で用いられている）が、また家政学者チャスティンの説では「家庭」（精神的意味が強調されている）が紹介されている。「家」、「家庭」そして「家族」が概念的な相互緊張関係なしにいわば同居している。しかも常見が戸田家族概念（4つの特質。引用文¹⁵⁾

を参照）について、戸田が吟味の末、家族の普遍的特質からは除いた種族保存機能と宗教的共同をあえて入れているのはなぜであろうか（従って常見の引用では6つの特質となる）。細かい説明は省略するしかないが、1つに「本邦固有の家族精神」の擁護から、もう1つに、もともと家族理論を取り入れるという意図に発したというより、あるべき家庭生活の論述が目的化されていたため、結果的に戸田家族概念が極めて不正確に一種「流用」されることになったとみられる。

この「流用」について、常見が明示的ではないが戸田の表現を取り入れていると思われる部分をみておきたい。常見はつぎのように述べる。すなわち「男女が結婚して夫婦となれば、相手方に対する愛情が起こり、…そこに利益・打算を超越した感情的合一化が成立する。すなわち、小集団社会としての家庭は、家員の安寧・幸福という目的を中心として成立する、自然的従属関係となるのである。…殊に家庭は子女の教養は無論、病者・老人を保護し、市町村における交際の主体となり、…家庭内の交際はやがて社会の結合を固くし、社会の風教を醇厚ならしめ」（「家庭生活の社会的職能」説明の一節）、また「家族は…経済的には共産団体を形成して没我的・信賴的態度である」（同「経済的職能」）¹⁴⁾（アンダーラインは福田）。このうち「小集団としての家庭」の「家庭」はいまでは「家族」に置き換えられねばならないことが明かであろう。それはともかく、つづいて戸田の所説をみると次のようである。

「1）家族は夫婦親子およびそれらの近親者からなる小集団である。2）家族はこれらの成員の感情的融合にもとづく共同社会である。3）家族的共同をなす人々のあいだには自然に存する従属関係がある。4）家族は、その成員の精神的ならびに物質的要求に応じて、それらの人々の生活の安定を保障し、経済的には共産的關係をなしている」¹⁵⁾。このうちとくに「共産的關係」はM.ウェーバーの Houscommunismus の考え方から撰ったものとされ、のちにその解釈をめぐる一定の論争もあった¹⁶⁾ほど、概念成立上の特定の背景を有するものであった。しかしこの用語を含めて全体として、常見が、戸田の言辞（アンダーライン部分に注意）を抵抗なく、しかも微妙に変換

しつとり取り入れたことがほぼ明かではないだろう。そうだとすれば常見は家族社会学の同時代的成果をいち早く摂取したのであり、しかも、同時にそこに似て非なる家族像が出現する結果になったことも判明する。その決定的違いは、常見が「家族」を専ら「家庭生活の職能」論に「縮小」したことであり、またこのことに対して何ら抵抗感をもたなかったという点にあると思われる。戸田家族理論が常見家庭機能論へと解消されたともいい得るであろう。

「家庭生活の職能の解説」では、第一に「倫理的職能」があげられ、ここでは夫婦は「家の経営の責任者でなければならぬ」、「家なる一大目標に向かっての献身的努力が必要」とされる。

「真に理想的な家庭」が求められているわけであるが、もちろんこれは家族理論の演繹的考察を媒介としたものではない。とくに戸田の家族における「感情的合一化」は決して家族の機能論に位置づけられるものではなく、家族結合の本質として把握されたものである。それが、常見においては「…感情的合一が成立する。すなわち、小集団としての家庭は、家員の安寧・幸福という目的を中心として成立する」（前出）というように、家庭の目的機能（職能）的理解の文脈に収められることになる。家族機能というものを家族結合の性格に基づいて成立するとみなす戸田独自の家族理論の構想とは無縁に、家庭の機能（職能）に家族の“あるべき姿”が求められている。

常見においては、家庭が個人に対して不可欠なのは「家は社会の雛型であり…一国の風教上大なる関係をもつ」から、「家庭生活の社会的職能」が重大関心事となる。このほか「経済的職能」、「教育的職能」そして「生物的職能」（種族保存機能）のいずれについても、「職能」が家庭生活の人倫的意義・役割のフレームで把握されている。表現上まぎらわしくもほぼ同様の「経済的職能」「教育的職能」「生殖的職能」をあげたG.P.マードックの核家族論（このほか「性的職能」がある）とも意味内容に加えて理論的枠組みを基本的に異にすることにも注意を促したい。家族の機能については、家政学でも概ね現在まで、個々の修正は伴うが、たびたび言及されてきた。しかしそこには、家族がいて家庭の機能が生じるとみるの

か、反対に家庭の機能に家族が準じる（べき）とみるのかでは、家族理論に対する立場に決定的差異が生じるという問題が内包されていたと考えられる¹⁷⁾。常見の立場がどちらであったかは繰り返す必要がないであろうが、その立場によっては、ときに家族理論を欠落させることのあることを、常見の事例は示していたといえよう。あるいは逆に、家族理論の欠如がそうさせたとも考えられる。いずれにせよ、「家庭」と「家族」の現実生活における一般的結合は、ときに研究者をしても両用語を不用意に混然一体化して使用させる要因となる。しかしこうした使用法を重ねていけば、かえって家政学と家族社会学の断絶面を助長する結果になりかねない。常見と戸田との学問的出会いが、家政学による家族理論の必ずしも有効な摂取に結びつかなかった事態は、この断絶面に横たわっているように思われる。

3. 家族理論への家政学的アプローチ

戦後日本の家族社会学における家族研究を総括的に整理した布施晶子氏によると¹⁸⁾、1945年から60年「家族近代化論」、1960年から70年「内部構造分析展開期」、1970年から80年「家族問題分析」展開期、1980年以降「転換期の家族論」展開期と区分される。それぞれの時期を順に簡単に特徴づけると、旧家族制度の批判とともにとくにアメリカ社会学の導入（バージェス、マードック、パーソンズほか）に積極的であった時期、家族を社会体系の下位体系として位置づけとくに役割理論を中心とする構造-機能分析に収斂した時期、高度経済成長のひずみと社会問題や生活問題の顕在化に対応した家族問題に取り組む研究が隆盛した時期、そして時代と政策転換を背景に揺れ動く家族、家族病理、地域社会と家族など多面的に実証分析と方法論の錬磨が行われた時期とされている。そして、こうした整理のうえで今日的課題として「従来の、家族を全体社会から相対的に切り離し独立の小宇宙として、しかも歴史的変動の過程からも切り離し研究の時点における現象をスポット的に切り取って分析する傾向の強かった視角と研究内容の再吟味が必要」という指摘に加え、改めて「家族の本質を問い、家族を分析する方法

を研磨」する必要にも言及されている。

これに対して、家政学の家族へのアプローチはどうであったらうか。あるいは常見『原論』以来、家族に対してどのような発展があったといえるであろうか。「核家族」という用語はごく普通に用いるようになったが、それをマードックの理論にまで立ち返って検討した事例はあるだろうか。また「時の人」であったパーソンズに賛意を表した家政学者がどの程度、家政学的検討を意識したであろうか。概括的にみて、少なくとも家族理論に関しては、家政学が独自の軌跡を形成してきたとはいえないと思われる。家政学原論部会発足が1967年であったことひとつとってみても、方法論に対する意識の高まりの後発性を看ざるをえない。この発足は「最も緊急なる事柄は…思想的理解であり、これが理論的基礎付け」（常見 先述）といわれてより30年も経過した後のことだったわけである。

しかもこの間に刊行された家政学原論関係の文献で、何らかの家族論を組み込んだものはきわめて少ない¹⁹⁾。常見以来、日本家政学の戦後展開に家族理論というブランクがあったとさえいえる。こうした状況については、家族研究のいわば本流が家族社会学の活動で明瞭になるに従い、家政学的研究が相対的に亜流ないし側面的研究にならざるをえなかった学問分野の力学的構図が無視できない。しかしいまから振り返ると、家族理論として家族社会学が万能であったともいえないだろう。「全体社会」や「歴史的変動の過程」から切り離された「独立の小宇宙」（前出、布施論文）とは、アメリカの家族理論モデルが構築した傾向が必ずしも否定できないし、また日本の土壤に移したにしても「相互作用論」という“ヒトに偏った”家族理論であれば、実は、ヒトの基本的に文化的意味を語る衣・食・住の具体的個性・展開を課題とするはばも少なかったと考えられる。一方、衣・食・住の“モノ・技術に偏った”専門細分化された家政学の展開では、家族という生きた集団の実体・実態を組み込む「余力」が乏しかった。家族社会学と家政学は戦後日本という場面でも相互に別個の論理・軌跡を為してきたと同時に、相互の限界面をも徐々に明かにせざるをえなかったといえるのではないか。

今日の家族に進展している事態は“ヒト・モノ・カネ”が統一的に視野に入る研究水準を要請していると思われる。母親や子供を巻き込んだ雇用場面の複雑化や消費市場の深化そしてマネーゲームの異常な心理効果など周知の諸現象をあげるだけでも、家族がいかにヒトとモノとカネの相互規定性のなかで変形を遂げつつあるか気づかれるのである。これらを前にして“偏った”科学の専門性が停滞するようであれば、科学の再編こそが急務となる。

翻って、こうした事態に、過去から展望を示唆しているように思われたのが、先に述べた20世紀初頭のアメリカの事例だったのである。同時代に社会的背景を共有しつつ、一種の分岐を遂げた家政学と家族社会学は、時代と、それへの研究者の主體的取り組みこそが科学地図を変えるという教訓である。また常見と戸田とのズレ違いは、家政学の側からみれば「家庭」を問題とすることの難しさを示唆している。しかし「家庭」は本来、ヒトとモノとカネが織りなす現実の構図である。「家庭」という用語に忍び込みやすい主観状況を整理して、現実に備えることが家政学が当面している課題だと考えられる。その場合、家庭概念展開の科学的あり方を支え、保証する不可欠の要件に、“家族重視の姿勢”ではなく、家族理論の研磨という課題が位置づけられるであろう。

注

- 1) 「家政学と生活科学は同じか」という問いへの回答が急がれるなか、それでも忍耐強く積み上げるべき議論の1つに、家族概念をめぐるそれがある。なぜならば、回答を学問的に追究するなら、そこには“家政学はいかに家族を問題とするか”という、より根本的な問いがハードルとして横たわっていると思われるからである。いまやや皮相的レベルで状況を見渡すと、家政学の一定の動揺の背景に「個人化（個計化も含めて）の進展」という認識の拡大傾向がある。この認識は、人間生活における家族という単位性が弱化され、替わって個人が台頭してきた、という点を強調する。加えて、家族に対する既存イメージに固着したままの研究領域では、こうした事実を科学的に乗り切る能力に欠けるという判断が浮上する。端的には、家政学が果してこの事態を乗り切れるかという疑問の出現が否定できない。またそれほどに「家族の変
☆P.19へ続く

☆P.16より

容」に対応できない家政学の一種の守旧的側面が目にとまり出しているといえる。にもかかわらず「家政学は家族を重視してきた」という関係者の主観は強いと思われる。ここではっきりさせていかなければならないのは「実際に家政学はいかに家族を問題としてきたか」という点についての事実であろう。その足跡を整理することも必要になる。本来、家族と個人とは代替可能な実体・概念なのか、という問いも含めて「家族とは何か」への学問的対応を本格化していくことが重要課題だと考えられる。本稿執筆（セミナー報告）の動機も、ここにある。

- 2) R.L.ハワード『アメリカ家族研究の社会史』（森岡清美監訳 / 矢野和江訳 1987年、垣内出版）p.22（J.モギーのはしがき）
- 3) たとえばディビッドE.シャイ『シンプルライフ』（小池和子訳 1987年、勁草書房）第2章
- 4) R.L.ハワード上掲書P.90
- 5) 同上書P.16
- 6) LAKE PLACID COFERENCE on HOME ECONOMICS Proceeding of the first, second and third conferences (1899~1901)P.13
- 7) 社会学が当時、境界領域として発生したことに注目。Home Economicsにも同様の性格をみることができであろう。
- 8) R.L.ハワード上掲書P.105以下

- 9) LAKE PLACID CONFERENCE（前掲）に教育カリキュラムとして、また研究領域区分例として衣食住等の細目が度々紹介されている。
- 10) LAKE PLACID CONFERENCE(前掲)P.18
- 11) ローラ・シャピロ『家政学の間違い』（種田幸子訳 1991年、晶文社）プロローグ参照。
- 12) 例えば戸田家族理論はリアル、フィアカント、M.ウェーバーなどドイツを中心とする西欧の家族理論の考察を基礎としているなど、学問的に基本的な両者の違いに検討を要する。
- 13) 常見育男『最新家事教育原論』（復刻 家政学叢書 12）の石川寛子氏による「解説」を参照。
- 14) 以下、常見の叙述部分の引用はすべて『最新家事教育原論』（復刻 家政学叢書 12）からのものである。
- 15) 戸田貞三『家族構成』第1章。
- 16) 喜多野清一「日本の家と家族」（『大阪大学文学部紀要』第11巻、1965年）を参照。
- 17) 1960年代中頃のいわゆる有賀・喜多野論争で家族の解釈をめぐり、それが生活機能集団であるか否かが1つの論点となった。この点、家政学の視点から再考する余地があると思われるが、本稿では断念せざるをえなかった。
- 18) 布施晶子「家族研究の軌跡と課題」（『社会学評論』38-2、1987年）。
- 19) 石川寛子「家政学原論の成立過程」（『家政学原論部会会報』21、1987年）。